博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）　前田　和泉　　印

学位申請者　笹山　啓

論　文　名　「脱出の希望、反逆の技法：ヴィクトル・ペレーヴィンのデビューから現在までを読む」

【博士論文の概要】

提出された論文の構成は以下のとおりである。

序論
第 1 章　「個人的」な自由を求めて
1-1. 出発地点
1-2. ペレーヴィン作品における「夢／睡眠」の表象
1-3. 遅れてきたソッツ・アート？――ペレーヴィンとソ連非公式芸術の影響関係について
第 2 章　2 つの「虹の奔流」
2-1. ペレーヴィンと仏教
2-2. 資本主義の桎梏
2-3. 資本主義時代の「愛」
第 3 章　「脱出」なきあとの「解放」をめぐって
3-1. 「ヒエラルキー崩壊」というテーマ
3-2. 「空（くう）」と国家――ペレーヴィンの創作におけるナショナリズムへの視線
結論

本論はロシアの現代作家ヴィクトル・ペレーヴィン（1962-）を扱うモノグラフである。デビューから間もない 1990 年代の作品群では、旧弊なソ連的メンタリティのしがらみから解き放たれ、「今ここ」から「ここではないどこか」へと飛び出していくことによって十

全な自由を獲得できるとペレーヴィンは考えていた。しかしその後、ロシアがソ連崩壊の痛手から徐々に立ち直っていくにつれ、代わって訪れた資本主義社会がもたらす閉塞感は払拭されないままに、かえってそうした「脱出」への期待は失われていく。そこで彼が新たに取り組んだのが、構造化された権力関係（ヒエラルキー）の内部で、一個人の自由の領分を切り開くという課題であった。「盆の客」（2003）を皮切りに、下位者から上位者への「反逆」による解放の可能性を作家は模索し始める。

本論では、このように「脱出」のテーマから「反逆」のテーマへとペレーヴィンの創作の重心が移っていく様子を 3 章構成で、時系列に沿って分析している。

第 1 章では主にデビューから『チャパーエフと空虚』（1996）までの作品群が分析対象とされる。第 1 節では「ゾンビ化」（1990）という、ペレーヴィンの文章のなかでは比較的知名度が低いエッセイが分析される。1962 年生まれのペレーヴィンは、ソ連社会が幼少期からの教育を通じてその構成員の個性を抑圧し集団の論理に同調するよう迫るシステムを「ゾンビ」「党の身体」といった比喩を用いて批判した。本エッセイに現れ出たペレーヴィンの政治性は、ペレーヴィンの上の世代のポストモダニズムの芸術家たちとは一線を画すものである。第 2 節では、初期作品に頻出する「夢／睡眠」のモチーフが分析される。またその思想的源泉としてソ連期の非公式文化の担い手であった Yu･マムレーエフの著作との比較も試みられる。第 3 節では、ソ連期の「ソッツ・アート」（コンセプチュアリズム）と呼ばれるポストモダニズム的特徴を持つとされる芸術潮流とのペレーヴィンの類似性、そしてペレーヴィンからのそれらへの批判を吟味し、ペレーヴィンが自身の上の世代のポストモダニズム芸術に抱いていた複雑な心境を明らかにする。第 1 章第 2、第 3 節では、今でこそペレーヴィンの代名詞のような扱いを受けている作品の東洋的色彩が、マムレーエフの著作におけるインド哲学由来の思想や、コンセプチュアリズムの芸術家 I・カバコフあるいは「集団行為」グループの A・モナストゥイルスキーらによる仏教的「空」の表象芸術への応用など、早くは 1960-70 年代から見られた、共産主義的ドグマからの脱出口として東洋思想を用いる手法の後継にあたるものであると考察されている。ペレーヴィンの気質は、後者のポストモダニズム的な美学的実験ではなく明らかに前者、つまりインド哲学の唯我論を独自に解釈し、全体主義的抑圧の下で個人の精神的自由を死守しようとした実存哲学の試みに親和性が高いのではないかと筆者は主張する。

第 2 章では、『チャパーエフと空虚』から『妖怪の聖典』（2004）までの作品群が分析されている。『チャパーエフと空虚』と『妖怪の聖典』では、「虹の奔流」という共通のモチーフがともにプロット上重要な役割を果たす。第 1 節では、この「虹の奔流」というモチーフを読解するために、ペレーヴィンの初期作品によく現れる「虹」の表象にまで分析の範囲を広げ、これがペレーヴィンの思想への仏教からの影響をよく表すものであると主張される。第 2 節では、『チャパーエフと空虚』と『妖怪の聖典』の間にある 8 年とい

う懸隔を重視し、その間に書かれた『ジェネレーション〈P〉』ならびに『数』（2003）、そして『数』を収録した作品集『DPP(nn)：どこからでもなくどこへでもない過渡期の弁証法』（2003）の他の短編を扱い、この時期のペレーヴィンにどのような変化が起きたのかが詳述される。第 3 節では、ソ連から資本主義ロシアへと物語の舞台を移し、ある種の創作上の蹉跌を味わったペレーヴィンが再度「虹の奔流」を『妖怪の聖典』で描くとき、そのモチーフにどのような変化が加えられたのかについて検討されている。

第 3 章では主に『エンパイア V』（2005）以降の作品へと目を向け、プーチン登場以降ロシアの地で勃興した新たなナショナリズムや、ロシアの保守的なジェンダー観に抵抗すべく現れたフェミニズムなどを背景に展開される、ペレーヴィンの権力論ともいうべきものが精査されている。第 1 節では、2000 年代に入ってからの多くの長編作品に共通して見られる「ヒエラルキーの崩壊」、すなわち上位者と下位者の関係のラディカルな組み換えというモチーフが、社会からの「脱出」をもはや志向できなくなった現代社会において作家が提示する自由への道筋であると主張される（ここでいう「ヒエラルキー」の一形態がたとえば「男／女」である）。第 2 節では、現代ロシアにおける有力なナショナリズム思想である「ネオ・ユーラシア主義」との対決という視点をペレーヴィン読解に持ち込み、これまで政治的な立ち位置をさほど明確にしてこなかったように思われる作家の反ナショナリズム的思想を浮き彫りにしている。

以上のように本論では、時系列ごとの作風の変遷を辿りながら、「時代」「国」と正面から切り結ぶことを常に自身の創作の柱に据えてきたペレーヴィンが、ある種の思想的一貫性を持ち続けていることが明らかにされた。

【審査の概要】

本論文の最終試験は 2021 年 2 月 22 日 14 時より Zoom によるオンライン形式で実施された。審査委員会は、前田和泉（主査）、沼野恭子（主任指導教員）、久野量一、野平宗弘、中村唯史（外部委員：京都大学大学院文学研究科教授）の 5 名である。審査では笹山氏が本論文の概要を口頭で説明した後、各審査委員との間で質疑応答が交わされた。所要時間は約 3 時間であった。

論文全体の講評としては、ペレーヴィンの思想的・美学的ルーツや作品世界の核心に正面から切り込んだ本格的な論考として、審査委員のいずれもが高く評価した。本論は、ペレーヴィンの作品を 30 年弱という長いスパンで捉え、主要作品を非常に丁寧に読解しながら、随所に刺激的な考察を展開し、先行研究を批判的に取り入れつつ、独自のペレーヴィン論を打ち立てることに成功している。また、文芸理論や現代思想を巧みに導入してテクストと響き合わせた点も優れている。卓越した文章表現力も見事であり、全体として十分な説得力と、読者を惹きつける力を持つ論文と言えよう。

その一方で、本論の有する課題や疑問点、いくつかの瑕疵についても以下のような指摘がなされた。

・プロレトクリトとゴーリキーを同列に扱うソ連文学認識（p.18）は適切ではない。
・作品解釈の細部に議論の余地がある箇所が見受けられた。
・『チャパーエフと空虚』に出てくる歌謡曲「鶴」を考察するにあたっては（p.157）、作詞者ガムザトフのエッセイを参照しておくべきである。
・ペレーヴィンとネオ・ユーラシア主義の「空虚」は異なるものであると結論づけられているが、本当にそう言えるのか。『チャパーエフと空虚』の段階でも両者は異なっていたのか。
・本論の論旨を展開する中で、その論旨からはやや外れるが、作家ペレーヴィンを論じるにあたって重要と思われるいくつかの作品（『恐怖の兜』『ニカ』など）への言及が不足している。
・「個」「個人」「倫理的」などの用語については、より丁寧な説明があった方がよい。
・全体の構成の中で 3 章が分量的に少なく、他の章と比べて踏み込みが弱い印象を受ける。
・タイトルの「反逆」という用語が内容と若干かみ合っていないのではないか。
・ロシアの文脈に精通していない読者には、本論中で繰り広げられるポストモダニズム論がわかりにくい。
・仏教思想との関連を論じた箇所では、実際にペレーヴィンがどのような文献に触れていたのかなどの実証的なリサーチが不足しており、またチベット仏教を論じる際の参考文献の選択がやや恣意的である。

これらの指摘に対して、笹山氏は的確に応答し、極めて生産的な議論となった。たとえばペレーヴィンの「空虚」がネオ・ユーラシア主義のそれとはどのように異なるのか、あるいは、ペレーヴィンにとっての「個人主義」とはいかなるものであるのかについて笹山氏は補足的な説明を行い、本論の主張を再確認した。また、3 章が弱いと指摘された点に関しては、そのような構成になるに至った理由を明晰に述べた。現時点での自身の課題についても笹山氏はしっかりと認識しており、今後の研究の展開についても明確な展望を持っていることが、最終審査における質疑応答から確認することができた。

以上、本審査委員会は、笹山啓氏の提出論文および最終審査の評価結果から、同氏が本学大学院博士後期課程の博士号学位の取得に充分な水準を満たしていると判断し、全員一致で同氏に博士（文学）の学位を授与することが適切であるとの結論に至った。